

湖畔の記

(20)

阿木津 英



四月二十九日、安藤直彦さんが会長を務めている兵庫県歌人クラブの招きにより、神戸短歌祭で「歌の無名性と地方性」という話をした。「無名性と地方性を尊重する」は、八雁創刊の理念である。なぜこれを掲げるのか、思うところをつたなくも述べてみた。

わたしは、「牙」という地方の小結社で短歌を始めた。石田比呂志が「牙」を再刊した、ちょうどその年の夏のことである。再刊の辞には、「石田上京前に創刊した第一次「牙」の「同人誌的少数精鋭主義を廃」し、第二次「牙」では、「この地方の歌びとを広く包含しつつ、尚且つ真卒なる文学集団としての存在価値を有し得るか」「地方結社誌の有効的可能性を実験」したいと掲げた。つぎに「第二次〈牙〉は、作品第一主義でゆきまします。作家的力量以外の何ものをも通用しませ

ん。又、他の結社の作風に対して自閉的、排他的態度をとりません。独善は常に戒むべきです」と掲げた。さらに創刊号編集後記に、運営と編集は集団体制でゆくが「但し文学に民主主義は通用しない、というのが私の偏見である」と書く。

「作品第一主義」「作家的力量」以外の、有名・無名、貧富の差、社会的地位の如何、あらゆる他の要素を通用させないのが「牙」だと、この石田比呂志の掲げる精神を、もちろんさまざまな事件は起こりつつも、わたしたちは了解しあっていた。八雁創刊同人でもあった渡辺民恵さん、井上みつゑさん、早くに亡くなった松屋くにさん、清田則雄さん、みんなこの精神に誇りをもつて集い、研鑽したのだった。

二、三年後にわたしは「未来」にも入会して、近藤芳美を代表とし、田井安曇と岡井隆の編集する「未来」を経験した。それによって、石田比呂志の「牙」の理念は、「未来」を通過して得たものだということを確信した。さらに、石田を通じて片山貞美を知り、あるいは玉城徹を知ようになるが、基本的に〈牙〉で培った価値観をつよめてくれる人々ばかりだった。

すなわちこれが、敗戦をはさみながら、近代以後の短歌という世界がつくりあげてきた芸術倫理だった。

*

短歌は、人々のあいだで作るもの。演奏者なり小説家なり、不特定多数にむかって演奏・創作するスタイルが、近代の市

場経済社会が成熟してゆくにつれて定着する。そうなるとおのずからコンクールなどで審査員の歓心にあてこんだり、不特定多数の人をめどにして作るようになるものだが、そのことと、人々のあいだで作ることとは、まったく異なる。短歌は小説などとは違って市場経済に適合しにくく、もっとも遅れて参入した文芸であるので、人々のあいだで作るという心性が名残をとどめている領域だ。結社という組織のあり方に、それを残している。

人々のあいだで作る、とは、創作者が不特定多数（大衆）に向かうのではなく、作品を間において人と人との関係があるということ。人というものは、どんな小さな組織でも、共感しあったり、反発しあったり、嫉妬したり憎しみあったり、欲にかられたり、誤解したりする。そういう生身のやっかい事にまみれながら、泥水みたいな人の世に浮き沈みしつつ、そこから何かしらきよらかなものを求めようとする力を失わない。善きもの、秩序あるかたちを求めて、作品に具現化しようとする。作品を介して、その求めようとする力を見とめ、理解し、さらにつよめてくれるのも人なのだ。

しかし、このいよいよおどましいとも言えるような人間集合に、善きものへの意志や、秩序ある世界へ向かう力が、どこに残っているというのか。

*

わたしはそれを、人ならば無名の、地方の、辺境にある人

々に見出すことが多かった。そんな人々との交流こそが、わたしを短歌に繋ぎとめたと言っている。

しかし、人間をつつみこんでいる自然の内蔵する秩序こそは、もっともわたしを励ましてくれる存在であった。

おおげさな話ではない。そこらへんの道ばたに揺れているメヒシバの穂の揺がりのすがたに、コスモスの一つの花のはなびらのすがたに、何という完璧な秩序かと、あるとき感嘆し、その感嘆の瞬間が忘れられないというだけのことである。

掌に柿の壺花を拾いあげ花のたくみに息のみにけり

山崎方代の歌だが、こういうことだ。青い小さな目立たない柿の花だが、拾いあげて仔細に見ると、驚くばかりに精緻にできていてうつくしい。あるいは、正岡子規が病床で毎日写生しているうちに、造化の秘密がわかるような気がする、といったあのことである。

無名性、地方性といったことも、この自然の秩序からわたしは学んでいる。短歌結社に集うおびただしい無名の短歌作者をかつて上田三四二さんは「短歌の底荷」といったが、「底荷」という言葉はあまり愉快でない。それより、それぞれの精力をしばって咲いている野の花を思うのである。道ばたのぺんぺん草だって、小さな花の白の清楚さ、しかもあの実のなんと可愛らしいこと。